

キタのまちのニュースレター



昨年の「落語と絵本のアニヴァーサリー1stラウンド」フィナーレ風景。

左端、上方落語協会・会長、笑福亭仁智師の当日は、毎回「司会・進行」に徹しきり、私たちと同じ思いでこのイベントを育てて来てもらっています。

コミュニティで出会う上方落語の世界

私たちは、「コアな落語ファン」ではないかもしれません。でも、落語という現在進行形の芸能が「生き物」でもあり、今という世の中とどう向き合っているかによって、面白かったりやや辛気臭かったり、「その噺の成否^{はなし}」が分かれがちであることは知っています。

だから、落語を称して「口」に「新しい」と書き『噺』という漢字が存在し、落語家に加え『噺家』という呼び名が生き続け、噺は「今という世の中・コミュニティ」に近接する、親しみの中に生き続けてきた芸能として、いつも新しい歴史を刻んでいるのだと思います。

「落語と絵本のアニヴァーサリー」も4年間にわたり過去4回、今年は5年目の5回目です。絵本と落語？……「えっ？ どんな組み合わせ？」……と、聞き返されることが多かった、そんなコンセプトでスタートしたこのイベントも回を重ねるごとに盛り上がり、毎回少しづつですが、階段を登ってきました。上方落語協会(会長：笑福亭仁智さん)と共催でやり続けてきたこのコミュニティ・イベントは、その名のごとく、「この企画から新しい噺を世に放ち、それが絵本

として皆さんの手に届く」ことを目標に立て、やり続けてきた企画です。ところが、絵本化への道のりは考えていたよりも、ずっとずっと遠いものでした。今回それが叶います。

そして、今年・第5回「落語と絵本のアニヴァーサリー1stラウンド」に参加する噺家さんも決定しました。

林家染吉、桂あおば、桂福枝、桂慶治朗、桂三実、笑福亭笑利、露の新幸、桂健枝郎、月亭希遊、桂笑金、桂八十助、笑福亭笑有、以上12名、ごつい強力なメンバーです。会場は、大淀コミュニティセンター 1階ホール。9月23日(火・祝)の開催です。「落語と絵本のアニヴァーサリー」を検索していただくと公式HPにヒットします。そこに「観覧申し込み」の案内が出ています。(会場定員に限りがございます。お申し込みはお早めに！)

絵本のことをもう少し……これが絵本かどうか、それとも落語本と表現すべきか？ それは本を手にした人の感じ方にお任せしますが、9月中旬頃には、このコミュニティ・イベントから誕生した、その名も『落語と絵本のアニヴァーサリー』と名付けた本が世に出ます。発刊日など詳細は、「落語と絵本のアニヴァーサリー」公式HP上で告知いたします。お楽しみに！！

🔍 落語と絵本のアニヴァーサリー

検索 🔍

そんなことができるのか？

北区民センターが主催する催しの中に「浪花百景タペストリー展」があり、今年も11月最初の連休(11/1～3)に開催予定です。この企画は、日本美術史がご専門で江戸期幕末に描かれた錦絵・浪花百景の研究者でもある大阪大学名誉教授の橋爪節也さんらの調査成果と助言を頂きながら「今のコミュニティと結び」親しみやすい内容に工夫を凝らしつつ、今年で第5回目を迎えます。

浪花百景の原版はほぼA-4サイズの大きさと、それを高精細に16倍(A-0サイズ)に拡大。かつ、耐久性のある布地にプリントし「浪花百景タペストリー」が完成します。今年で70景が揃います。眺めるだけでも楽しめますが、全部をパーテーションに吊るしてのワークショップは、より楽しいものです。ただ、昨年、困ったことになりました。吊るす「パーテーションの数が足りない」のです。さて、どうしよう？

昨年は何とか乗り切りましたが、今年はもう「このやり方では対応不可能」なことが明らかでした。橋爪先生にも相談し、今年は「こんなやり方」ということになりました。会場はこれまでよりずっと広い2階・ホールフロア全体を使用。パーテーションも一部使用しながら「ホール・フロア全体と舞台」を活かし、展示手法に工夫を凝らす。です！

概略方針だけは決まりましたが、簡単ではありません。さらに検討しこんな方針になりました。多色の養生テープで簡単・簡便に大阪市図をフロアに描く⇒タペストリーを大阪市図の位置に平置き、「景」が立て込んでいるエリアではパーテーションも使用⇒ホール舞台上から「浪花百景を眺め」つつワークショップ⇒「さあ、これから街歩き」と、舞台から降り立ちホール・フロアでの街歩きを楽しむ。そんな趣向です。

ただ、企画が企画倒れにならないかととても心配しています。これから「図上演習」を繰り返さなくてはなりません。さてどうなりますか？



2024年11月「橋爪先生のワークショップ風景」

大阪大学と酒

4ページの「浪花百景歳時記」は、今号から「大阪大学ミュージアム・リンクス 大阪大学適塾記念センター」准教授の松永浩先生にご担当していただけることになりました。

「適塾」とくれば緒方洪庵ですが、松永先生は阪大の公式グッツ銘酒「緒方洪庵」のブランディングを担当されました。「緒方洪庵」は愛媛県西予市にある酒蔵・緒方酒造が造っていましたが、2018年の西日本豪雨で被災したため、銘柄が阪大に引き継がれたそうです。

「緒方洪庵と酒」で検索すると色んな詳細情報と出会えます。また、「阪大と酒」でも様々な情報が出てきます。さらに、松永先生の著書(編著)ものづくり 上方「酒」ばなし-先駆・革新の系譜と大阪高等工業学校醸造科- (大阪大学総合学術博物館叢書8)では、もっと、もっと詳細な「阪大と酒」のことが紹介されています。2012年出版のこの本はネット通販で気軽に購入することができます。そういえば、2014年放送のNHK朝の連続テレビ小説「マッサン」の制作にもかわられたそうで、そもそも……阪大工学部の前身・大阪高等工業学校には戦前、日本唯一の醸造学高等教育機関である醸造科が設置され、酒造業界に多彩な人材を輩出し、その大阪高工醸造科出身の代表的人物が日本人初のウイスキー蒸留技師で、ニッカウヰスキー創業者の竹鶴政孝……なんだそうです。

このように、松永先生は酒の研究はもとより、「お酒を通じた交流文化」にも精通されており、それはフィールドワーク型(飲んで語り合い「談論風発」を深めるスタイル?)だとお聞きました。ちなみに、大阪高等工業学校は北区中之島5丁目の付近にあったそうです。

北区堂島にはサントリー本社もあります。「浪花百景歳時記」とは何の関係もないようですが、浪花百景には「お酒にまつわる絵」も少なからず存在しています。

今後の連載、楽しみです！





キタ歩き日本旅

群馬県
の巻

全国約半数の道府県事務所に北区「大阪駅前ビル」に！旅の玄関口みたい！！それが「キタ歩き日本旅」です。



はるかな尾瀬／上の写真「高崎だるま」(写真提供：2点とも群馬県)と「お蚕」(写真提供：富岡市)

群馬県の県庁所在地は前橋市。その前橋市から電車で約1時間のところに富岡市があり、世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」があります。一見して、「大阪市とご縁があるの？」ましてや「北区とは？」ところが……こじつけでも無理やりでもなく……『富岡製糸場と東洋紡』で検索すると一発で、「AI」がこんなことを教えてくれます。

富岡製糸場と東洋紡は、日本の近代化における重要な役割を果たした二つの施設です。富岡製糸場は、明治政府が設立した官営模範工場として、日本の近代的な製糸技術導入の先駆けとなりました。一方、東洋紡は、渋沢栄一らが設立した大阪紡績を前身とし、関西の紡績業発展の中心的役割を担いました。(以下省略)

もちろん渋沢栄一は新1万円札の「あの渋沢栄一」。東洋紡は北区に本社を置き続けている日本と大阪を代表するモノづくり企業です。

渋沢栄一は旅の達人でもあり、民俗学者・宮本常一を支援し続けました。宮本常一は「忘れられてしまうかもしれない」昭和40年代までの日本の全国・津々浦々を旅し、日本の習俗的な価値を正真正銘歩き廻って調査し、「膨大な記録」を残しました。著書「忘れられた日本人」は特に有名ですが、宮本は在野の「時」を大阪で暮らし、中之島剣先の天神橋を渡り切った(今もある)郵便局にも勤めています。

モーレツに暑いニッポンの夏は「避暑の旅」に出かけたい。渋沢さん(あぁ一万円札)が何人必要かはさて置き、日本型リゾートの先駆けが草津温泉とその周辺に広がっている。1980年代後

半から1990年代初頭にかけてのバブル景気は「リゾート」という欧州生まれの余暇概念を広めたが、「バブル」がはじけると「この表現」も霧散したかのごとくであった。ところが、日本型リゾートの先進地・群馬では、その言葉も概念性も生き生き継承され続け、そのような先進性をもつ群馬県では今、県土全体で『心と身体を癒す旅』を提唱し、それは『リトリートぐんま』として公式サイトで紹介されています。

日本型リゾートの先進地・群馬で『リトリートぐんま』。なんだか語呂が素晴らしい。「渋沢さん」と友達になれそうな気がするし、「避暑の旅」がグン・グン・グン・グン身近な気がします。旅は「まず気分から!」。「渋沢さん」は遠くても、群馬県大阪事務所に行けば群馬の観光パンフレットは気軽に入手できます。群馬県は近い、まずはココから！(文責：キタのまちのニュースレター編集室)



400年以上の歴史！伊香保温泉(写真提供：群馬県)

浪花百景歳時記

大阪大学ミュージアム・リンクス
大阪大学適塾記念センター

准教授 松永和浩

淀川を三十石船で下ってきた旅人が「記念に購入？」……

第九十六景 「長柄三頭」 歌川国員画

「浪花百景」には、高槻の「三嶋江」やら守口の「佐太村天満宮」など、浪花と呼ぶには疑問な大坂近郊を描いた作品がある。現在の毛馬の閘門の付近である「長柄三頭」もその一例で、淀川を三十石船で下ってきた旅人が、記念に購入することを狙った作品かもしれない。古い地図で見ても二つの河川が分岐する面白い地形である。

道行ナビゲーター 大阪大学名誉教授 橋爪節也

「関西の水瓶」琵琶湖から「茅渚の海」大阪湾まで流れる淀川は、大阪市内では梅田の北を通過している。しかし近代以前には、天満の南を通過して中之島に至り、大阪湾に注ぎ込んでいた。新旧淀川の分岐点こそが、長柄三頭なのである。

江戸時代の名所案内『淀川兩岸一覽』（一六一年）にある通り、長柄三頭とは、旧淀川（大川）と長柄川とも呼ばれた旧中津川（新淀川）が分流する地点で、北方向に伸びて両川を隔てていた砂州を指す。近世にはここを中継点に、長柄の渡しと毛馬の渡しが設けられ、北摂方向へ向かう人々が渡し船で行き来した。

本作の下部には渡し船が描かれ、中央部を横切る長柄三頭、その手前を淀川が北から南へ（画面右から左へ）、奥を中津川が西へ流れている。遠景に妙見山（能勢町・豊能町・川西市の境界）を望むこの場所は、風光明媚な地として知られていた。妙見山の頂上には能勢妙見堂があり、近世中期から京・大坂より参詣者が多く集まった（「摂津名所図会」）。妙見山への参詣路である能勢街道は、天神橋から長柄の渡しを越え、在郷町・池田（現・池田市）を経由して能勢妙見に至った。長柄三頭の砂州は現在の北区長柄中付近から伸び、江戸後期には四丁（約440メートル）にも及んだという。明治十八年（一八八五）の陸地測量部地図では、東岸の毛馬村（現・都島区毛馬町・大東町）の南端辺りまで砂州が伸び、その延長に中州が同村中央から北端辺りまで広がっている。しかし明治四十二年の陸地測量部地図では、中州は残るものの、砂州は姿を消している。というのも、明治十八年に発生した大洪水を機に、明治二十九〜四十二年にかけて大規模な淀川改良工事が行われた。長柄三頭付近には毛馬洗堰・毛馬閘門が設置され、旧淀川（大川）は流量の調整が可能となり、中津川（新淀川）は川幅500メートル超のほぼ真っすぐな放水路となった。これにより、長柄三頭の風景は失われてしまったのである。

長柄三頭は明治期に失われたが、この辺りに架かり古代には既に失われた長柄橋は、人柱伝説も相俟ってそのはかなさを偲び、西行や藤原定家はじめ多くの歌人に詠まれた歌枕でもあった。現在では淀川改良工事に関わったオランダ人技師デ・レーケや「日本の治水港湾工事の始祖」沖野忠雄の顕彰碑、工事の際に川から引き上げられた大坂城の残念石、旧毛馬閘門・洗堰（国指定重要文化財、土木学会選奨土木遺産）、与謝蕪村の生誕地・句碑が点在している。

■編集・発行：北区民センター・大淀コミュニティセンター・都市コミュニティ研究室

■指定管理者：一般財団法人大阪市コミュニティ協会

■発行月：7月・10月・1月・4月の各月下旬発行

北区民センター 〒530-8401 大阪市北区扇町2-1-27
✉ kitakumin-center@abelia.ocn.ne.jp

大淀コミュニティセンター 〒531-0074 大阪市北区本庄東3-8-2
✉ oyodo-comini@abelia.ocn.ne.jp

前号このページの本文 11 行目から始まる内容は『その天満堀川は大阪湾の干満に応じ、通水の上下流がその時々で真逆となり、あたかも「源流」かと見紛うような痕跡が北区菅原町にたどることができですが、……』と記述すべき所、正真正銘《上流域「源流」》と誤解を生む記述でした。この点、お詫びし訂正させていただきます。なお、このご指摘は北区山崎町の「O様」から、暖かな励ましと共に頂きました。ありがとうございます。

編集後記

